茅野市総合教育会議　会議録

１．日　時　　令和５年８月 23 日（水）　　開　会　　午後　　４時 30 分
　　閉　会　　午後　　６時 00 分

２．会　場　　市役所 701・702 会議室

３．出席者

	市長	今井　敦	教育長	山田　利幸
	職務代理者	矢島　喜久雄	教育委員	勅使川原はすみ
	教育委員	若御子雅英	教育委員	竹村　節子
出席職員	こども部長	五味　正	生涯学習部長	上田　佳秋
	企画部長	田中　裕之	こども課長	阿部　香織
	幼児教育課長	笹岡　俊江	学校教育課長	渡辺　雄一
	生涯学習課長	竹内こずえ	文化財課長	小池　岳史
	スポーツ健康課長	河西　茂廣	スポーツ健康係長	松田　剛史
	教育総務係長	春日　雅彦	教育総務係主事	小池　智也

４．傍聴者　　２名

茅野市総合教育会議次第

令和５年８月２３日（水）午後４時３０分

市役所７階　701・702 会議室

１　開　会

２　あいさつ

３　議　事

（１）縄文のビーナスプランについて

（２）中学校における学校部活動の地域移行について

（３）その他

５　閉　会

〇学校教育課長

ただいまから令和５年度第１回茅野市総合教育会議を開始します。本会議は茅野市総合教育会議運営要綱第６条に基づきまして、公開とします。初めに、今井市長からご挨拶をお願いします。

〇今井市長

本日は大変お暑い中、またお忙しい中お集まりいただき誠にありがとうございます。このお盆前後、茅野市内でも様々なイベントが行われ、ちのどんばんも４年ぶりに行われて、皆様の笑顔が増えて本当によかったなと思います。また、お隣の諏訪市でも、台風を押しのけて花火大会が実施できたということで、子どもたちの間にも日常が戻りつつあるのではないかと思っています。今年はそうした、いわゆる平常運転に戻る年ということで、これからの子どもたちの環境整備や教育そのものについて皆様方にご意見をいただきながら、確実に前に進めていければと思っていますので、よろしくお願い申し上げ冒頭のご挨拶とさせていただきます。

〇学校教育課長

この後の議事進行については、今井市長に進めていただきたいと思います。

〇今井市長

それでは、議事進行をさせていただきます。

まず１つ目、子ども一人一人の多様性と力を伸ばすことを目的とした教育プランである「縄文のビーナスプラン」について意見交換をさせていただきたいと考えていますので、最初に山田教育長から、このプランについての説明をお願いしたいと思います。

〇山田教育長

最初にいきさつをお話したいと思います。ちょうど４年前に予算計上しましたが、そのときには、多様な学び創造事業という名称でした。特に市長さんが言われたギフテット的な教育、一人一人の多様性を伸ばす１つとしての具体的な教育ということで、研究をスタートさせました。

コロナの前年になりますが、名古屋、岐阜、渋谷それぞれへ視察に行って研究する中で、子どもたちの多様な学び、多様性とは何かということを探りました。ところが、その研究が進み出したところで、コロナがまん延し、さらに知恵袋だった森田洋司先生が突然亡くなられてしまいました。森田先生自身が八並先生を後継者として紹介していただいた経緯があり、昨年度から、理科大の八並先生、信州大学副学長の永松先生を中心メンバーとして数回にわたって会議を開き、今年５月、正式な会議を開いて、この第一次案を決定したという経緯です。

まず、タイトルについて説明します。縄文のビーナスプランの名称についてですが、縄文のビーナスには雲母がちりばめられていて、近くで見るとキラキラと光っています。ところが遠くから見ると光っているかわかりません。これは私たちの願いですが、子どもたちの近くへ行って一人一人の子どもを見た時に輝いているものがあり、その輝きを見ていきたいという気持ちから縄文のビーナスプランとなっています。

次に、内容について資料を見ながら、お話したいと思います。「みんな同じ」から一人ひとり多様性と力を伸ばす教育に転換していきたい。子どもの多様性を積み込む教育を作っていくことが一番大きな目標となっています。そして、長野県教育委員会の多様性を包み込む事業づくりがありますが、システム的にはまだ県全体では動けないところがあります。一人ひとりの子どもは本当に多様な存在で、多様な可能性を持っています。ところが、現在の学校教育のシステムに考えたときに、人的な環境面、或いは実践的な研究面でも、かなり問題があります。例えば特別支援教育では、クラスに発達障害の子どもがいるとすると、私たちは本当に気をつけないと言ってはならない３つの言葉を言ってしまいます。１つ目がたとえば「みんなと同じにしなさい。みんなできているじゃない。」２つ目が、「そんなことを小学校５年生になってやってどうするの、できなければ中学へ行って苦労をするよ」３つ目が、「わからなければ友達に聞いて友達と関わりなさい」です。もちろん友達と関わることは大事ですが、一人一人にもっと寄り添っていかなければいけないと思います。

実際にある中学校の女子生徒は、米粒の半分くらいの大きさの鶴を織ったり、１枚の紙から 10 個 20 個の作品を繋げて織ったりしています。今までは、私たちは特技ぐらいにしか見ておらず、１つの才能として見ていませんでした。さらに、プログラミング教育の中では、実際に自分でソフトを作り出す生徒も出てきています。得意な子も、そうでなく困っている子もいる中で、その違いを認めていく教育に転換していかなければいけないと思います。ただこれは多くの時間がかかってくると思います。私たち自身の考え方やシステムそのものを 10 年、15 年単位で変えていかなければいけません。

以上を踏まえて縄文のビーナスプランを作成しました。グランドデザインに戻っていただき、今までの茅野市教育を整備し直して、体系化します。どのように体系化するのかというと、学校の中では「生き方教育」、「調べ学習コンクール」、「キャリアパスポート」、「ICT 教育」等を行ってきました。学校の外では「公共施設主催の学び」、或いは「プログラミング教室」、「市立図書館」、「CHUKOI らんどチノチノ」という様々な学びがあります。この学びをもう一度体系化し直していこうと考えています。例えば、学校外の学びだとこの資料一覧表にあるとおり「夏休み子ども科学教室」をはじめとして、八ヶ岳総合博物館・公民館・学校教育課を中心として今年度、25 個の講座を実施しました。また、縄文市民科から「縄文アート展」、或いは「調べ学習コンクール」の講座を実施しました。これも視点を変えて一人一人の個性を伸ばす方向と考えたときに、昨年度は 1500 作品、強制ではなく３人に１人は子どもが出展しました。また、宮川小のドリームゼミ、永明中学校のジョブギャラリー、或いはイングリッシュ Day キャンプ、サポートルーム等の活動をもう一度、一人一人の子ど

も個性に合った形で、整備していき、学校内だけでなくまち全体が様々な学びの場になったらいいなと思います。

３つ目、みんな同じではなく一人ひとりの多様性を認めるために学校は、「変わっている」、「特殊な」子どもたちを尊重していける空気を作る中で、茅野市教育が今まで大事にしてきた「自分の人生、自分たちが生きていくまちの未来を描く子ども」に育てていきたいと思います。

２枚目に目指す子どもたちの学びの姿をいくつか書いてありますが、例えば、一人ひとりの興味関心を本当に今まで大切にしてきたか、発達障害のある子どもへの支援、ギフテッド的な教育の要素になりますが、得意な才能を持つ子どもたちの力を伸ばす、不登校・不適応の子どもの学びの場、小中一貫教育をもう一度仕切り直す必要性があると思います。

次のページ、重点ですが、不登校不適応の子どもたちの学びの場を保障していくということで、１学期から準備して２学期の９月途中から、新たなスタートを切ります。学びの保障のチラシをご覧ください。各学校に校内子どもサポートセンターを設置し、相談体制の窓口になります。そして、各校にミニサポートルームを設置し、永明中学校、長峰中学校、東部中学校、玉川小学校では、既にあるサポートルームを強化します。さらに、２学期から永明小学校にもサポートルームを設置します。

これによって、不登校の子どもたちや、不適用の子どもたちが、自分の選んだ場所を学び、そして自立でき、保護者も相談が出来る体制として、校内子どもサポートセンターを作っていくなかで、市では、育ちあいちのの中で、市子どもサポートセンターを作って、人員的に新たな方を配置するわけではなく、今まで統括コーディネーターの業務内容を変えていく事を６月から準備していきます。

令和５年度の重点として、１つ目が、不登校・不適応の子どもたちの学びの保障、２つ目が、調べ学習コンクールとしています。今までは資料の収集分析、思考判断表現という、いわゆる、思考能力に沿った形で考えてきましたが、それは大事にすると同時に個性的なものを大事にしていきます。実際にここ２年間の調べ学習コンクールの作品の質が、かなり大きく変わってきています。非常にユニーク作品も増えてきていますので、大切にしていきたいと考えています。

３つ目の ICT 教育についても、現在サポートセンターで一生懸命取り組んでいます。そして、得意な才能を持つ子どもへの教育の研究も具体的に始めていきたいと思います。いわゆるギフテッド教育とは違う、文科省でも７月に得意な才能を持つ子どもの教育のあり方についての提言を導きの糸として考えていきます。

最後のページになりますが、小中一貫教育について 29 年度から始めていますが、永明小学校、米沢小学校、永明中学校で、新たなモデルの取り組みを開始しています。１学期の最後に、こんな教育を作りたいという提案を３校の保護者にお配りしましたが、それを基に、ひとつ一貫教育の新たな方向の枠づけを考えていきたいと思います。

この縄文のビーナスプランですが、いわゆる学びのプラットフォームという形で、メンバ

ーとすると、現在のところ、商工会議所の方、東京理科大学の副学長先生、読み聞かせボランティア、市民館の館長。などの方々が縄文のビーナスプランのスタッフに入っていますが、今後さらに増加していきたいと思います。

○今井市長
　教育長から説明があった縄文のビーナスプランについて、ご意見、また、ご質問等あればお願いします。

○矢島委員
　学校外での学びについて、体験を通した学びの機会を大切にしていただきたいという思いから発言をさせていただきたいと思います。
　ご説明いただいたビーナスプランの学校外での学びについてですが、私は夏休みに行われた八ヶ岳総合博物館の「食べる宝石『琥珀膳』を作ろう」の講座を参観しました。地域素材とすれば、寒天、その他には水、砂糖、粉寒天、着色料を使って作成していくわけですが、親子そろって作業に没頭する姿が印象的でした。
　そんな中で、お父さんが息子さんを連れてきて、お父さんも興味あってこられたのかを聞きいたところ、「俺しか連れて行く人がいなかったから来た」とおっしゃっていましたが、本当に一生懸命やっていました。講座の中に、この寒天を取上げてその博物館を使ってこの茅野市の特産である寒天を学ぶ機会も取り入れられていて、とても組み立てが素晴らしいなと思いました。なかなか、こういう機会がなければ、博物館へ足を運ぶのかということも心配されるわけですが、きっとこれを体験した子どもが大きくなる過程で、何か学びの課題が生じたときに、「博物館に行けば」という気持ちになってくれるのではないかということを感じさせていただきました。今資料を見ると、様々な施設でいろいろなことを取り組まれていらっしゃることがよくわかりました。こういう体験を通した学びの機会をぜひ充実させていただきたいということを願っています。

○今井市長
　その他意見、質問ありますでしょうか。

○勅使川原委員
　縄文のビーナスプランは、義務教育間の年齢層の計画と捉えてよいでしょうか。というのは、ここに学校での学び、学校外での学びと書かれていて、もっと広く、子どもから大人まで全部含めてのことを教育として考えていくのかと思ったので、この内容からするとそういうことなのかと疑問に思った事が１点と、すべてこの中に網羅されているとは思いますが、「よくわからない」というのが私個人の感想です。例えば今、不登校のお子さんたちの関係にはミニサポートルームを設置してその対応をしていこうと考えていると思います。

さらに、いろいろな特性を持った子どもたちに対しても、学校外での学びの場を設けたり、ミニサポートルームで対応したりしていくと読み取っていますが、例えば教室内での子どもたちに対して、何がどういうふうに変わってきているのか、変えていくのか、この「みんな同じから一人ひとりの子どもの多様性を伸ばす」という観点では、どのように変わってくるのか、また今、それぞれの学校にある特別支援学級の子どもたちに対してもどのように変わっていくのか、一人一人の多様性を生かして力を伸ばすようにということならば、もっと人的配置が必要ではあると思います。今の配置ではとても無理が出ていると感じていて、それについての具体性があまり感じません。その２点をお伺いしたいと思います。

○山田教育長

第１事案は義務の子どもたち中心です。これは広げていく予定があります。具体的に一番今頭悩ましている課題が、市を挙げて行ってきた読書図書館教育を学校教育では、朝読書という形で頑張ってきましたが、やはりコロナの中で市民読書をさらに広げていく必要があります。

もう一つ、北部中学校や東部中学校の生徒会が公民館活動へ関わり、公民館活動、生涯学習を基礎に据えていく中で、第二次についてみんなで考えていきたいと思います。

学校教育の内容的には、先ほど言ったサポートルームの方は制度的なものを起こすわけですが、まずは考え方の発想を変えていこうと考えています。例えば、特別支援の話で、確かに人はもっといればいいと思います。ただ、教員定数についての法律があって、増やせない中で、茅野市の場合はそれに対して特別教育支援員の方々を手厚く配置してくださっています。昨日も特別支援教育支援員の方を中心に 150 人集まって研修会を行いました。

事業の方は、県がどのような事業づくりの方向を出していくかが関連してくるか思いますが、やはり限界はあると思います。どうやって多様性出していくのか、例えば１足す１を勉強しましょうと言えば、学習問題が共通になってしまうのでやり方で多様性を出していく、という工夫を具体的に積み重ねていくことが大切です。

○勅使川原委員

計画自体は、今までやっていることからこれからのことまで全部網羅されていると思いますがだからこそ、茅野市の教育が力を入れている絞った観点が、見えにくくなっているので、絞っていただければいいなと思います。

次は市長さんにお聞きしたい事ですが、学校外での学びという観点も含めて、茅野市に住んでいる子どもだからこそ、経験しておいたほうが良いことが幾つかあると思います。そして、その経験を大人になったときに胸を張って自慢できるような大人になっていただきたいと思っていて、今、子どもの数が減っているのにもかかわらず経済的などいろいろな面で大変なことがあって、子どもの実体験や経験する機会が失われてきていて、具体的なことを言うと、プールは今年学校のプールは夏休みなかったその分は市営プールを開放していた

だいたので、子どもたちは沢山利用したと思います。ただ、スキー教室については、今年の冬は特にスキー場の利用料が値上がりしたことなど様々な理由により、実施できなくなっています。その一方で、スキー場は他の地域の子どもたちの誘客を進めて、子どもたちにスキーを体験させてあげていることはとてもいいことですが、茅野市の子どもたちが、自分がそんな経験もせずに大人になった時に、自分たちで自慢できるかと考えたら、それは無理だと思います。八ヶ岳が近くにあり、八ヶ岳登山をすることも、学校で経験するので一生のうち一度は経験できます。それもなくなってしまったら、死ぬまでに１度も身近にある山に登ったことが無い子どもが出てくると思います。やはり地域柄で茅野市に生まれ育ったからこそ経験させておきたいことはあると思うので、その辺りは教育としても子どもたちに対して、もっとお金をかけていただきたいと思います。経験できる場は削って欲しくないので、ぜひ市長さんも考えていただきたいと思います。

○今井市長

「経験させる」とはいったどういったことか、を考える事が大切だと思います。要するに、どういう方法で経験をさせる事がいいと思いますか。

○勅使川原委員

冬のスポーツについては、スケートセンターを利用して、スケートは沢山経験しています。しかし、スキーはほとんど経験していません。自分もそうでしたが、子どもの頃、こういうところに住みながらスキーをやっていないことは、少し臆するところがありました。

なので、せっかく自然豊かな茅野市で生まれ育っていくのであれば、年１回くらいは、スキーを経験させて欲しいと思います。生まれ育ったからこそできることは経験して大人になっていただきたいと思います。

○今井市長

恐らく、この議論で重要なことは、どこまでを公の事業として実施するかだと思います。

実際自分たちが子どもの時は、スキーをするにはお金がかかりました。なので、スキーが一般的なスポーツだったかというと、実はそうではなくて、私自身も中学生になって初めてスキーをしました。今はスキー場が沢山できて、当時に比べて非常に身近なものになっていると思いますが、そこを公的なものとしてどこまで実施するかは議論が必要だと思います。

また、個人で気軽にスキー場を利用できる環境が整備されてきてはいますが、部活もままならない状況が起きてきている中で、スキーや登山といったものを全部学校で行う体制今後も継続していくことができるのか、どうすれば継続できるのかを議論していかなければいけないと思います。

○勅使川原委員

現在、スキー場の利用料が上がっていることと、保護者負担が増えてしまっていることを背景に実施できない状況があります。このままでは、先ほど言ったように、茅野市に住みながら、１度もスキーを経験できない子どもたちが出てきてしまうと思います。スキー場や関係団体との議論を重ねていく中で、小学校の間ぐらいには、６年の間に数回は雪山での体験をして大人になってもらいたいと思います。

○今井市長

スキー場もお客さんに来てもらいたいので、そういった子どもたちへの指導などを含んだパッケージがあって、それに対して、何か支援ができないかという具体的な案があれば、良いのですが、今競技も多様化していて、昔に比べたらとても競技の選択肢が広がって、それぞれの競技人口は減少しています。そのような状況にあって、１つの競技だけを、公的に支援することは、様々な問題が発生する可能性があり、その辺りの議論がどうしても必要になってくるので、今運動公園の様々な施設を維持するだけでも、厳しい状況になっているという背景から考えて、行政として子どもに体験の機会を十分に与える事ができるように議論を重ねていければと思います。

スケートについて、歴史的な背景を考えると、かなり地域に密接したものがあり、スキーやその他の競技と比較をする必要もあるかと思います。財政面を適正化していく中で、どういった形で、地域の特色を出すのかという点を行政として文化系の活動も含めて、全体的で突っ込んだ議論をしていく必要があると思います。

○勅使川原委員

市長の考えもわかりました。ただ、子どもの教育に関しての予算は財政が厳しいこともよくわかっていますが、削らないほしいと思います。

○今井市長

今、全庁的に行政改革を行っていることは皆様ご存じかと思いますが、今私たちがやろうとしていることは、単純に予算を削ることや、事業を存続について論じるのではなくて、この茅野市のまちづくりの仕方そのものから論じて、予算のシフトをしていこうということを考えています。要するに、今まで実施してきた事業の中で、本当に必要なもの、大切にしたいものをしっかと議論をしていく作業を行っていきます。１年間で結論を出そうという改革ではないので、あと２、３年かけて結論を出していかなければいけないと思っています。

○教育長

一昨年までは、児童生徒の安全を十分に配慮して実施していましたが、去年あたりから保護者に負担をお願いする額でなくなってきてしまっている状況にあります。

スキー場の経営や市の財政状況も変わってきている中で、スケートだったら、市バスを使

えますが、スキーはバスを貸し切らないといけないといった金銭的な面が大きな問題になっていると思います。

○竹村委員
　本会議の前に新人教育委員研修会を受けてきのですが、その中で、信州大学の方講師からまさに今の議題について、スポーツだけでなく、いろいろな経験、体験活動に地域格差が出ているというお話がありました。
　都市圏の子どもたちは、お金を出して、多くの体験活動に参加して、地元の子たちの方が、経験が少ないという現状が胸に染みたので、それを考えて今結論を出してというわけではないですが、茅野市として子どもの体験活動の充実を図っていければと思います。

○若御子委員
　最近、新聞等にも財政の問題が掲載されていて、教育の面でも体験や体験施設の整備に関して難しい状況だと思います。
　そんな中で、茅野市として、企業から出資を募り、その代わりに大々的に企業のアピールをするネーミングライツのような取組は検討されているのでしょうか。

○今井市長
　ネーミングライツそのものを行っている施設はありません。ネーミングライツによって発生するお金や企業側が期待する広告効果、施設の今後の整備等様々な要因によって実現していない状況です。ただ、似たようなものだと、運動公園内の整備で活用した企業版ふるさと納税があります。その他にも、商工会議所の方や様々な方と協力して市内施設をより良いものにしていければと思います。

○山田教育長
　昨今は、国立科学博物館も寄付金を集める時代で、修学旅行でも定番な国の最先端施設が立ち行かなくなっている状況です。全国各地の博物館が活動を縮小していく、あるいは潰れてしまっている中で、茅野市の場合は皆様のおかげで頑張っています。尖石縄文考古館は人数が回復して、神長官守矢史料館にはかつてないほど人が来て、総合博物館は市民研究員と子どもの講座で活気があります。教育委員会としては、お金のこともありますが、活動をさらに充実させてくことを考えてきたいと思います。

○竹村委員
　各施設が活気づいている要因はなんでしょうか。

○山田教育長

守矢史料館にしても、尖石縄文考古館などは、いわゆるイベント化した観光地ではなく、学問的な色彩が強い施設だと思います。市内の施設を訪れれば、自分の学びができることが要因の１つかと思います。なので、縄文の精神性と学問性にしっかりと着目したことが、良かったと思います。

先ほど竹村委員が言われた体験の格差という点で、今年、府中市の小学校 13 校が茅野に研修旅行に来ました。自然の森や八ヶ岳で体験学習して、２泊３日のうち１泊を茅野市に泊るというプランで、府中ではかなり茅野に着目して、児童の皆さんは焚火の墨顔を真っ黒にしながら積極的に体験していました。

〇今井市長

現在、府中や、狛江など様々な地域から体験学習の受け入れを DMO が主となって行っています。ただ、その体験学習は、茅野市内の子どもたちでも体験できるようになっています。

市外の児童受け入れをとおして、体験学習の幅を広げていく中で市内の児童生徒の体験へも還元できればと考えています。

〇山田教育長

今計画中ですが、府中市の小学生が来られた時に、北部中学校の生徒が市民ガイドをするという計画があります。この取り組みも、先ほど言った多様な学びになると思います。教室の中の学びだけではなくて、このような学びを多く取り入れていければと思います。

〇今井市長

就任直後、縄文まつりや縄文トリエンナーレについて、イベントで人は呼べないので、本質を磨くことで集客に繋がるということで中止にしました。

尖石遺跡は日本で最初に指定された縄文史跡です。土偶だけを、売ろうという話ではなくて、茅野市の縄文遺跡があちらこちらにあって、面として売っていきたいと考えています。そのためにもしっかりと本物を磨くことが必要だということで、再整備計画等を作って、10 年かけて周辺整備を始めています。本物志向の施設に人が集まってきてくれるはずなので、その一環として縄文市民ガイドについても、育成を行っています。

〇文化財課長

現在ガイドは 28 人いて、そのうちの多くはツアーの案内役を目指しています。考古館が受けた旅行会社のツアーの案内をお願いしていますが、今は学芸員が同行しています。場数を踏んでもらい、一人でもツアーの案内ができるように支援を進行っています。

〇今井市長

北部中学校の生徒についても、同じような段階にあると聞いています。

以上のことを通じて、縄文の知識を得て、茅野市民として縄文は語れるくらい知識を蓄えていただきたいと思い活動しています。

史跡整備について、説明をお願いします。

○文化財課長

令和３年から令和 12 年までの 10 年計画ということで、尖石遺跡第二期整備を進めていて、今年が３年目になります。整備計画の経過として、平成 12 年に尖石縄文考古館の建設にあわせ、第一期整備を行いましたが、それから 20 年ほど経過する中で、遺跡の大事な部分の崩落や、植林したカラマツを整備しなければいけない等の問題が出てきています。そこで、今出てきている問題を解決し、できるだけ良い状態にしてくことをこの 10 年で行っていきます。そして、その先 10 年で「縄文時代集落研究の出発点」となる遺跡という本質的な価値を磨き上げて、「縄文の佇まいの再現」を合言葉に整備していければと考えています。

○今井市長

説明にあったとおり、少し手間はかかりますが、着実に整備を進めていますので、ご報告しました。

○竹村委員

地域の者の代表という立場の意見として、先ほど勅使河原委員からも出たように、広がり過ぎていてわかりにくい点もありますので、茅野市の一貫教育のねらいを、○○をとおして、○○の力を養い、○○した学習者を育成する。といったように一文で表していただきたいということが、地域の者の希望です。また、できたら学校づくりのねらいについても、一文でご提示していただきたいと思います。

理由は３つです。１つは、地域の人に学校づくりのビジョンが伝わりやすくなる、浸透しやすくなるからです。地域と学校との繋がりがとても、うまくいっているなと感じる地域の住民の方は、教育目標をすらすらと言えていて、そのため、地域の子供たちともその目標に沿って接することができていると言っていました。

２つ目の理由は、そのビジョンを共有することにより、地域の人が支援的参加から、協働的参加にシフトしていくのではないかと思うからです。共有して、子どもたちの成長の予測を立てるところ地域からのものが入っていけば、地域の人、子ども、教師も一文に対してどうかという考察ができるのではないかと思います。

先日、泉野の教育を作る会に参加させていただいたとき、地元の方から、読書もいいけど子どもをもっと外で遊ばせてほしいと言われました。それも一理ありだと思いますが、それは子どもに対してどんな力がつくのかという形で話を進めていけば、単純に読書がいい遊ぶことがいいという結論にはならないので、まず大事なのはそのビジョンを明らかにしてもらいたいということです。

３つ目は、教員の主たる業務内容が授業、学びを中心とした活動になると思ったからです。具体例として、ある塀にいたずら書きがあり、それに対して持ち主のおばあちゃんは、学校に電話しました。すると、学校は対応しますと連絡がありました。その後おばあちゃんは塀の落書きのことを近所の子供たちに聞いてみました。するとある児童が、妹と喧嘩してむしゃくしゃした時にいろいろなところに書いていることがわかりました。

そこで、おばあさんはこの問題は単に塀が傷つけられたことだけでなく、他の要因があることが分かりました。

しかし、学校は、コロナの対応で忙しく、校長先生がぞうきんを持って塀を清掃しただけでした。このような時に、学校教育目標が共通化されていれば、その部分は地域に任せることもできると思います。地域に任せることで、子どもたちは学校でも地域でも共通した教育を受け成長できると思います。

〇山田教育長

今の話は、コミュニティスクールの関係に繋がっていて、ビジョンの共有、育てる子ども像の共有はコミュニティスクール中心でやっていく必要があります。また、同じ子どもを育てるにしても、目標を一つに絞るとなった時に、地区によって大きく違います。市全体とすると、生きる力を育む、そして多様な学びを軸として学校で相対化してければと思います。コミュニティスクールが今年６月に全て国型に移行して、29 年からのコミュニティスクールはかなり成熟してきたということがあります。なので、このこともよく考えて、子ども像の共有に取り組んでいきたいと思います。

縄文のビーナスプランの進め方ですが、校長先生が職員にしっかり説明するという方法もありますが、今年４月のように新たなプランの説明を各学校で機会を見つけて２学期中に行っていきたいと思います。

〇今井市長

次に中学校における部活動の地域移行について議論できればと思います。現在茅野市では、市スポーツ協会などの団体と相談しながら、運動系と文化系部活動の地域移行について検討しています。スポーツ健康課と学校教育課から現状を説明していただきます。

〇学校教育課長

学校教育課では休日部活と地域移行の文化芸術の部門について、各学校の部活動に携わっている先生方に、どのように今後進めていくのが良いか意見を募っている状況です。以上になります。

〇スポーツ健康課長

はじめに、運動部活動の地域移行に関するイメージ図をご覧ください。国の方針としては、

少子化に伴う部活動の減少や教員の働き方改革等もあり、地域移行について方針が出されています。

茅野市としては、部活動の地域移行だけにスポットを当てるのではなく、茅野市全体のスポーツのありかたについて考えていく方針です。

７月にスポーツ推進協議会を立ち上げました。資料１にもありますが、新型コロナの影響であらゆる世代でスポーツの価値があることを再認識できた。子どもの体力の低下、運動する生徒の減少などで部活動の存続が危ぶまれている。高齢化社会の進展によって「フレイル」の増加の可能性があり、予防対策を講じる必要がある。など、茅野市の地域スポーツの現状と課題として挙げられています。そういった課題を解決していく中で、スポーツが持つ課題や価値を活用して、すべての市民が生涯にわたって生活や心がより豊かになる「ウェルビーイング」の実現を目指したいと考えています。そのために、スポーツ推進協議会が中心となって茅野市の地域スポーツ文化の裾野を広げ、基本方針であるスポーツ推進計画を推進し、地域スポーツを盛り上げていきます。

２ページ目には、組織のイメージ図を載せてあります。参画会員については、各種スポーツ関連団体代表、保育園小中学校代表、保護者代表、高齢者・障がい者関連の方々です。また、協議会の中の専門組織として、仮称としていますが、運動部活動地域移行検討委員会を設けて検討していきます。その中に種目別部会を設置し、さらに専門的な話合をしていきます。

３ページ目に名簿をつけていますが、スポーツ関連団体の代表者としてスポーツ協会の正副会長や三役の方や、スポーツ少年団、スポーツ推進委員で構成されています。

４ページ目には、令和５年度中に取り組む事項とありますが、推進計画は2018年から2022年までの５年計画であるため、一年間延長してはいますが改定が必要となっています。改定については、昨今の世の中の実情や、茅野市の実情を踏まえ、部活動の地域移行についても盛り込んだものにしていく必要があると思います。

部活動の地域移行の内容については、５ページにあるように、昨年12月に国からガイドラインが示されています。７ページの前文になりますが、１段落目には学校部活動は、教師の献身的な支えにより我が国のスポーツ・文化芸術振興を担ってきた。ということ、２段落目には、部活動は、生徒の自主的で多様な学びの場として教育的意義を有してきた。ということ、３段落目は、少子化や働き方改革によって今までの部活動の形態を存続することは厳しくなっている。ということ。４段落目は、学校と地域との連携・協働により、持続可能な活動環境を整備する必要ある。ということが記載されています。それを踏まえて９ページになりますが、上段２行目の部活動の教育的意義を継承・発展させ、新しい価値が創出されるようにすることが重要としています。３つ目の〇の最後になりますが、地域の実情に応じ生徒のスポーツ・文化芸術活動の最適化を図り、体験格差を解消することが重要としています。

その下Ⅰでは、学校部活動を実施する場合に望ましい環境となるよう方針が示されています。Ⅱでは、地域のスポーツ団体や学校担当者等からなる協議会などで、受け入れ体制を

整備する方針が定められています。Ⅲでは、学校部活動の地域連携や地域クラブ活動への移行に向けた環境整備が示されています。令和５年度から７年度までの３年間を改革推進期間として、地域の実情に応じて可能な限り早期の実現を目指すとしています。Ⅳでは、大会等の在り方の見直しとして、中体連の大会にクラブチームが参加できるようなったり、別枠でクラブリーグの部を設けたり見直しが始まっています。

10 ページに学校部活動の地域連携、地域クラブ活動への移行の全体像のイメージを添付しています。左の緑色で囲われた部分は、今後の経過措置として学校部活動の地域連携の方法が示されており、ページ下段の緑色の部分についても同じです。③-１では、地域人材を部活動指導員に充てる方法で、③-２では、学校単位で成り立たない競技について、合同部活動として、地域人材を充てる方法が示されています。休日の地域クラブ活動については、上の黄色で囲われた部分になりますが、②-１総合型地域スポーツクラブや②-２の民間事業者等については、茅野市ですぐには対応できないと考えています。茅野市では、①の市区町村の関係団体と連携した形を目指しています。

11 ページには、仮称の検討会で令和５年度中に取り組む事項を掲載しています。検討員会で取り組む事項、各学校で取り組む事項、教育委員として取り組む事項をリストアップし、項目が実施でき次第下段の項目に取り組んでいきます。

12 ページには、学校部活動の地域移行に向けたロードマップの案を載せています。３段目の市の協議会設置は、スポーツ推進委員協議会です。また、関係者会議として囲われている部分は、地域移行の検討会になります。これらの期間を経て令和７年度までに各種検討と体制整備を進めて、令和７年度から中学校休日運動部活動の段階的移行を開始し、令和８年度には、休日のクラブ活動の完全移行と書いてありますが、できるところから７年度から移行していきたいと考えています。説明は以上です。

○今井市長

ただいまの説明について、ご意見ご質問あればお願いします。

○矢島委員

ロードマップ等と併せ、粛々と進められる計画を今見せていただきましたので、進めていただくことを第１に考えていますが、部活動に参加していない生徒が多くなってきているのではないかということを危惧しています。青年期に一つのことに取り組むことが、将来プロの選手にならなくても、心の支えになるのではないかと思います。多くの生徒が一つのことに一生懸命になることを大事にしていただきたいなと思います。

運動に関して、私が住んでいる金沢地区には、私の子どもが小さい頃、小学校には、男子は野球、女子はソフトボール、冬はスケートのクラブがあり、そこに入ることが当たり前でしたが、今は野球もソフトボールも無くなり、スケートも少人数で細々とやっているような状況です。ぜひ身近にそのような団体が無くなってきた今ですので、体験する機会、スポー

ツや文化芸術に幼少期から接せられる機会をぜひ作っていただきたいと思います。そしてそれが、スポーツや文化芸術の振興に繋がってくるのでは無いかと考えています。以上です。

〇勅使川原委員

中学の部活動は今本当に大変で、一つの中学校だけでなく、また、一つ市町村だけでなく子どもたちが、他市町村からも一緒になって活動しなければいけないくらい人数が減ってきているので、この計画の、部活動のさらに下の小学校、保育園、幼稚園のうちからスポーツに関わることの中での中学部活動という考え方はいいと思いますが、中学校の部活動だけにスポットを当てた際には、一市町村だけでは厳しいので、諏訪圏全体で、部活動の在り方や方向性について、首長部局と教育委員会でどう考えているのかをお聞きしたいということと、この問題は市だけで考えられる問題でなくて、大きなそういう枠組みの中で考えていかなければいけないと思うので、そういった取り組みを進めていただきたいなと思います。

令和７年度から休日クラブを休日の地域クラブ活動に移行していこうとしていますが、その場合、責任問題や人材などいろいろな問題が出てくると思うので広い範囲で考えていただきたいなと思います。

〇若御子委員

部活動の地域移行は進めていかなければいけないし、いろいろな計画が組まれているということで十分理解できました。いろいろな課題もあると思いますが、地域移行をするにあたって、メジャーなスポーツは比較的方法はあると思います。その中で、マイナーなスポーツや、マイナーな文化系部活動は、現実問題以降できない可能性もさらに高くなると思います。そうなったときに、結局教職員の皆様の働き方改革がそもそもの発端にあると思いますので、現状教職員の方は、週 40 時間の労働時間の中で、勤務時間をずらしたり、週休三日にするといったような工夫はされているのかどうかは率直な疑問です。もしそういった工夫が出来れば、地域移行しなくても無理なく教職員が対応できるのではないかと思います。

〇竹村委員

私は一貫して、どんな力を養うか一文で表すことが大切だと感じています。統一していないと、指導者の方も地域の人が協力してくれても余計ごちゃごちゃになってしまうと思います。

〇山田教育長

３年以上になりますが、各市町村で部活のガイドラインを作って、教職員の部活の関わり方を決めています。勤務時間の関係があるので、夜の遅くとも 18 時以降は関わらない、そ

れから休日の場合も練習時間を制限し、週のうち休みを取る日も決めています。そのような形で対応をしています。そのことがあるので部活の地域移行という問題もありますが、一番は、少子化の中で、すでに学校ごとで成立しない部活も出てきています。例えば、永明中学校での野球は、永明中学校、長峰中学校、原中学校３校合同で１チーム作るところまで減少が進んでいます。なので、少子化の中で、部活が存在しなくなって、先生たちも異動がありますので、子どもたちが運動離れしてしまいます。今までの部活の良さは、先生が熱心に指導をしてくれて、運動に不向きな子にも目をかけてくれることにありました。しかし今それがだんだんと無くなってきている現状を文科省やスポーツ庁は危惧していると思います。

そうした中で、部活の地域移行自体が、技術的に大変な点がありますが、単純に地域移行した際に、危惧しなければいけないことは、地域移行した部活に参加する子どもが少なくなってしまう、下手をすると、上手い子だけの選抜チームになってしまうことです。また、活動場所によっては、時間的、経済的な問題も保護者に出てきてしまい、運動が限られたものになってしまいます。それではいけないので、市全体のスポーツのあり方からもう一度地域移行を行っていくと同時に検討していきたいと思います。小学校に入る前の乳幼児期に運動好きな子どもを育てて、そこから小学校、そして中学校の地域移行部活動で活躍していき、また茅野に戻って暮らすようになった際には子どもの面倒をみてあげるという長いスパンで考えていかなければいけないというのが一つです。

勅使川原委員が言われた具体的なイメージは、６市町村の中ではほとんど進んでいません。なので、イメージがはっきりしたところで協力体制が出来てくると思います。年に数回全県で情報交換していますが、あまり進んでないのが現状です。国からタイムスケジュールが出ていますが、茅野市の子どものこと中心に進めて行きたいと思います。

○今井市長

正副連合長会議や広域連合議会でもそういった話は出ていません。

○山田教育長

今のところアンケートを取ったりしていますが、指導してくれる人がいるかどうかが課題です。

○今井市長

まだ途についたばかりということで、議題の内容としてはこれから懸案事項も出てくるかと思います。

最後に何かありますか。

○勅使川原委員

ここ数年間感じていて、市長が先ほど言われた行財政改革でも話が出ましたが、市内では、

子どもたちがどんどん減っていて、昨年生まれた子供は 300 人を割っています。そんな中で、現在の学校規模での運営を続けていくと、学校によっては一学年 10 人程度の学校も出てきてしまうと思いますが、それでは子どもたちの教育環境としては本当可哀想に思います。なので、子どもたちのより良い教育環境のために、学校規模適正化に是非とも一歩踏み出していただきたいと思います。これは、すぐに実行に移せることではないので、市長、教育長がいらっしゃる間に一歩二歩と検討会等で進んでいただきたいと思います。

○今井市長

そこはやはり踏み込んでいかねければいけない部分だと認識しています。ただ、打ち出し方なども含めて様子を見ながら進めていかなければいけないと思っていますが、行政とすると一方では、子どもを産みたくなるような「まち」にするために整備していかなければいけないとも思います。コロナになる前は、出生数は 400 人ぐらいでしたが、それが 300 人台になり、昨年は 299 人で 300 人を切ってしまったということで、コロナの影響も大きかったと思いますが、今年来年でどれだけ子どもが生まれるかをすごく注目していて、ここがどの程度の人数になるかをまず見極めたいなと思っています。ただ、6 年後の児童数の推移ついては、公表させていただきました。そうすると、やはり 1 学年 8 人、学校で 60 人ぐらいという学校も確実に出てくる状況です。その 6 年から先は不明ですが、要するに子どもたちの教育環境として何が一番いいのかということを、市民全員で論じなければいけない時期が本当に来ているなと思います。基本的な考え方として、一つの小学校の子どもが少なくなったので、もう一つの小学校と統合する論じ方ではなくて、茅野市の義務教育のあり方、未来の学校はどうあるべきなのかをみんなで論じていきたいと思います。まだ、数年時間があるので、その間に方向性を決めて、学校の在り方について論じていければと思います。委員の皆様には、今後ともご意見をいただければと思います。

○勅使川原委員

子どもの数が減っていることもありますが、義務教育から市外に出ていってしまい子どもも増えています。家庭的に恵まれていたり、何か目標持っている子どもを育てたいという親は、私学通わせるという流れが、大きくなってきているので、その点も含めて、学校の在り方について議論していただければと思います。

○今井市長

大変活発なご議論をいただきましてありがとうございました。今日いただいた意見は今後にしっかりと生かしながら、茅野市の教育行政を進めていきたいと思いますのでよろしくお願いします。以上で進行役を下ろさせていただきます。

○学校教育課長

長時間にわたる議論ありがとうございました。以上で令和５年度第１回茅野市総合教育会議を閉じたいと思います。